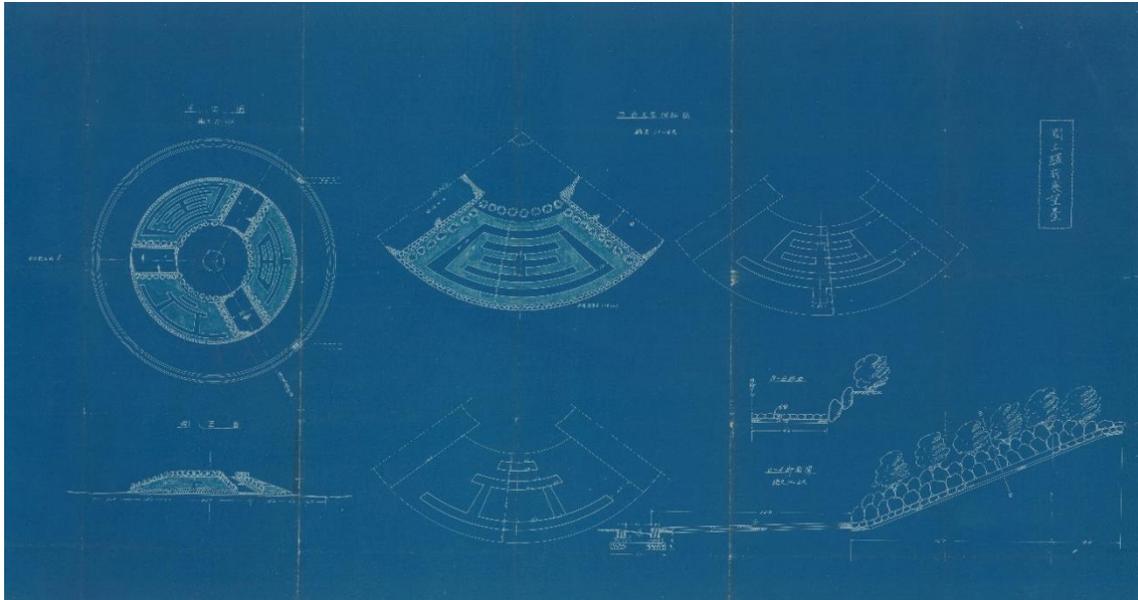
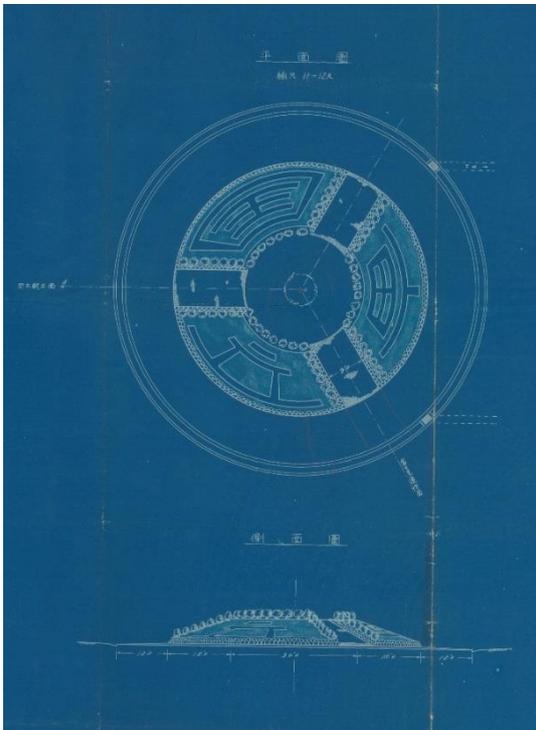


『赤い三角屋根』誕生—国立大学町開拓の景色—展
 展示資料の紹介-3



資料1 国立駅前展望台図面 大正14(1925)年頃 国立市所蔵(プリンスホテル旧蔵資料)

資料1の青焼き図面は、2019年に株式会社プリンスホテルから国立市へと寄贈された多くの資料のうちの1点です。



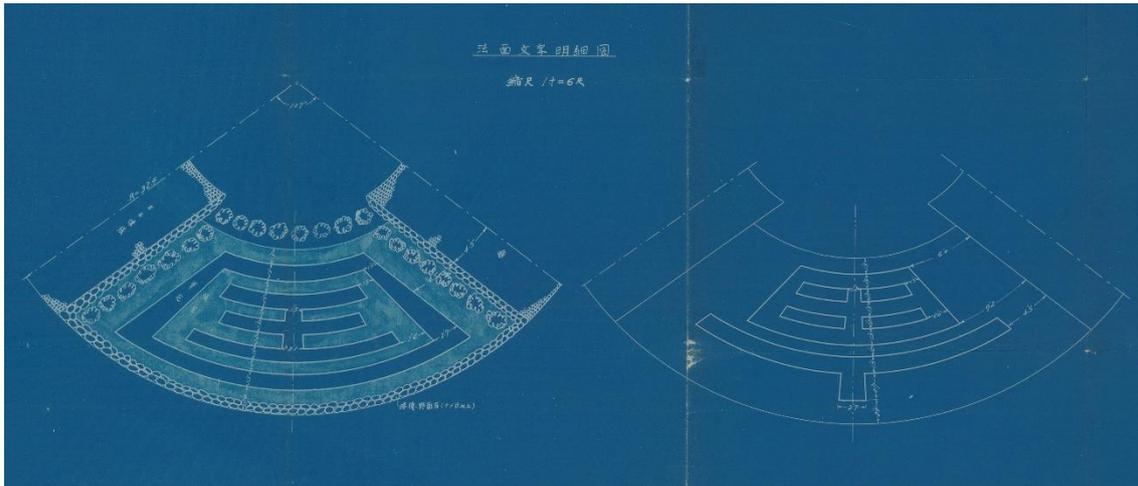
資料1の部分拡大-1

初回(第2回でも触れています)の資料紹介で、国立駅の駅前広場にある現在の円形公園には、国立駅開業後に水禽舎が設けられていたこと、またそこでは水鳥たちが飼育されており、国立を訪れた人々の駅前の人気スポットとなっていたことを紹介しました。

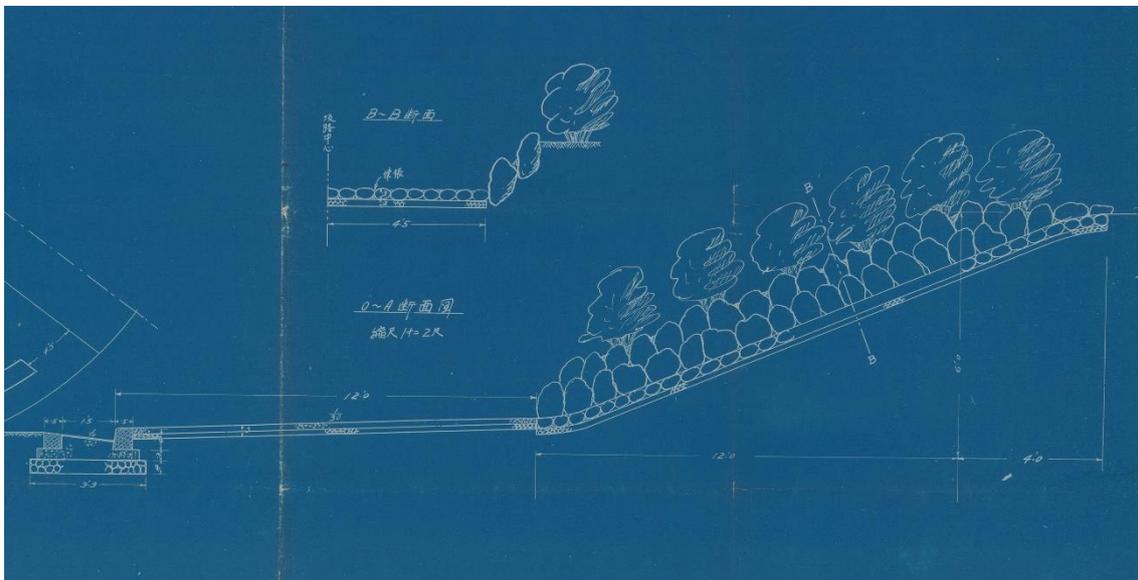
今回紹介する資料は、『国立駅前展望台』と題された青焼き図面で、国立駅前に円形の展望台を設ける計画があったことを窺わしめるものですが、その円形の形状や大きさ¹および駅前に位置するという点からして、現在の円形公園のところに設置が予定された施設と考えられます。

資料1に拠ると、この展望台は6尺(約180cm)の高さとして計画されており、展望台

¹ 資料1の側面図に記されている寸法によると、この展望台は周囲の歩道とみられる部分を含めて直径84尺(25m強)の円形として予定されています。水禽舎の設置された円形の広場部分について、直径を15.5間(28m強)とする図面があり、展望台の計画と概ね同じ大きさであったものとみられます。



資料 1 の部分拡大-2



資料 1 の部分拡大-3

の上からは国立駅方向・富士見通り方向など 120 度の均等な角度となる 3 方向へ、玉石の練張による幅 9 尺（約 270cm）の坂道を設け、側面には草花と張芝で「国立町」の文字を表すことになっています。また、展望台の周囲には、歩道とみられる幅 12 尺（約 360cm）の平地部分（排水のためとみられる緩やか傾斜が外側に向けてついています）が廻っており、さらにその周囲には排水のための L 形側溝を設けることになっていたのが分かります。

なお、国立大学町の設計に携わった箱根土地株式会社（以下「箱根土地」とします。）の中島隼氏によって遺された数多くの資料²の中には、この展望台計画に関する予算書とみられる資料が存在しています（資料 2）。

² 中島隼氏の遺された資料には、国立大学町の開発を知るうえで参考となる資料が数多く含まれています。この中島隼氏の資料に関しては、渡辺彰子氏による『国立に誕生した大学町—箱根土地（株）中島隼資料集—』（株式会社サトウ、平成 27 年 8 月 2 日）で詳細に紹介されています。

国立駅前広場展望台工事費予算

工種	品目	形状	呼称	員数	単価	金額	摘要
下水	花崗石	45x120	円	45	200	171.00	延長約45尺
	合	42.5x120	円	98	150	141.00	加工費共-
	敷砂利	5寸220	立方	25	45.00	112.50	
歩道	コンクリート	1:2:6		17	140.00	238.00	
	敷砂利	5寸220	立方	20	45.00	90.00	
法面	コンクリート	1:2:6		20	140.00	280.00	内取除12.00坪
	野面石	拾目以上	立方	130	45.00		
	盛土		立方	45.00			
	野面石	拾目以上		20	50.00	100.00	腰積用
	ソノ	高サ二尺	円	70.00	100	70.00	
	敷砂利	5寸220	立方	0.4	45.00	18.00	
	大玉石	5寸220		10	45.00	45.00	
	コンクリート	1:2:6		0.7	120.00	84.00	
	草花		10坪	0.7	200	140.00	
	張芝			45	200	88.00	
天端	人夫		人	50	200	10000	
	植木		人	20	300	6000	
	砂利	5寸220	立方	0.7	5000	3500	
雑費	洗砂利	5寸220		0.5	6000	3000	
	合計					18250	
						200000	

資料 2 国立駅前広場展望台工事費予算書 大正 14 (1925) 年頃
明窓浄机館所蔵 (中島陟資料)

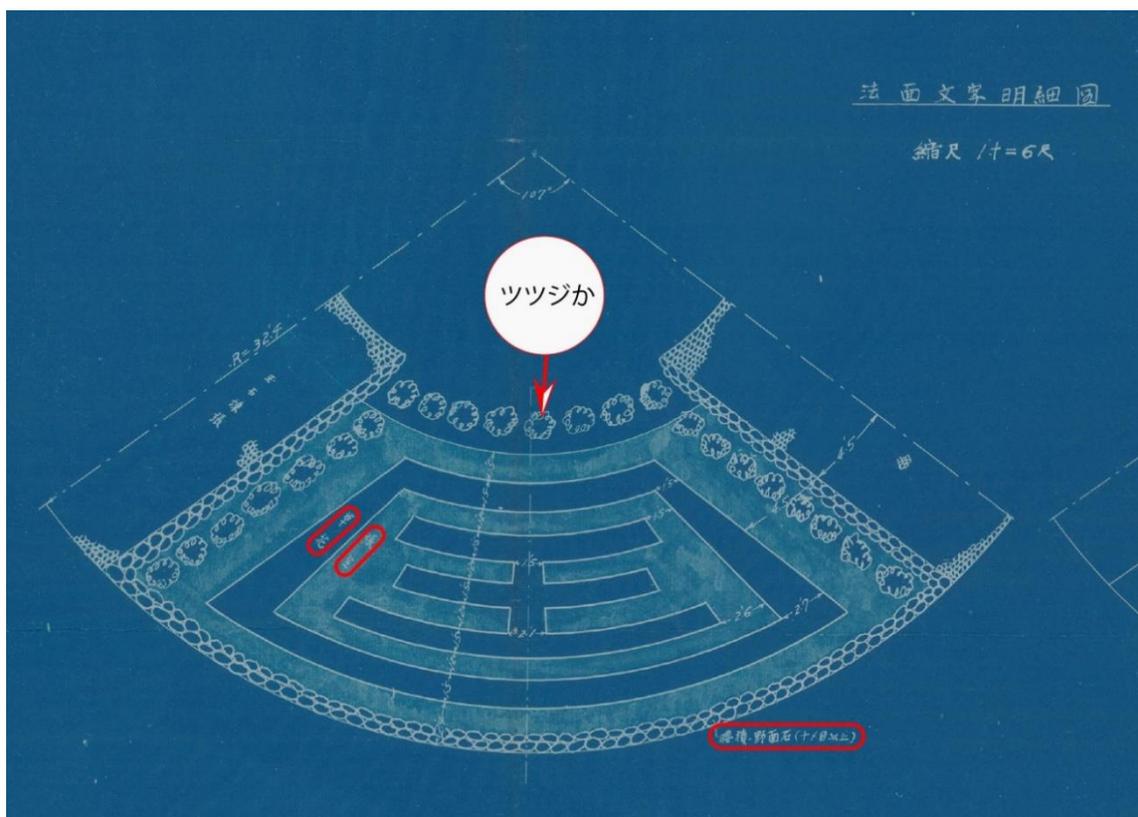
資料 2 の予算書では、「工種」として「下水」「歩道」「法面」「天端」「雑費」などの各工事種別を示し、そこで用いる「品目」やその「形状」「呼称」「員数」「単価」「金額」などが記されており、合計金額 20 万円の工事として予算化されていたことが知られます。

例えば、資料 2 の予算書で法面における「野面石」をみると、「拾目〔貫：引用者〕目以上」(「形状」に記載)の大きさの石を、「腰積用」(「摘要」に記載)として用いることが示されています。資料 1 の青焼き図面で、「法面文字明細図」にある「国」の字の図をみると、「腰積・野面石 (十目以上)」と記載されているのが確認できます。また「国」を表すために「草花」と「張芝」を用いることが図面から分かりますが、資料 2 の予算書にも法面に「草花」と「張芝」の品目が計上されていることが確認できます。

資料 1 と資料 2 が互いに関連した資料であることは、そのタイトルのみならず、それぞれの記載内容における関連性からも窺うことができるものです。

余談ですが、資料 2 の予算書を見ると、法面において「高サ二尺マテ」の「ツツジ」を 70 本用いることとなっています。先ほどの資料 1 の「法面文字明細図」にある植栽らしき書き込みは、資料 2 の予算書にあるツツジである可能性が考えられるところです³。

³ 資料 1 の「法面文字明細図」にある「国」の字の図には、23 本の植栽が描かれています。この文字は法面に 3 箇所ありますので、この図から計算すると合計 69 本の植栽をなすものと考えられます。資料 2 の予算書にあるツツジは、これとほぼ一致した本数 (70 本) が計上されています。



資料1の「法面文字明細図」の「国」部分の拡大・加工
 して、下の写真（資料3）をご覧ください。この写真資料も先ほどの資料2と同じく、中
 島陟氏によって遺された資料で、数多く遺存する写真資料のうちの1枚です⁴。



資料3 建築中の国立駅舎と箱根土地仮事務所 大正15（1926）年
 明窓浄机館所蔵（中島陟資料）

⁴ この度の展示（『『赤い三角屋根』誕生』展）では、中島陟氏によって遺された写真資料を数多くお借り
 しています。これらの写真資料は、そのほとんどが同氏によって撮影されたものであることが長男の中
 島渉氏により語られています（渡辺彰子『国立に誕生した大学町一箱根土地（株）中島陟資料集一』
 （株式会社サトウ、平成27年8月2日）「あとがき」）。

手前に写っている人物も気になる場所ですが、奥に建築中の国立駅創設時の駅舎が写し撮られています。その手前をみると、駅前広場の現在の円形公園のところに盛り土がなされ、その上に建物が設置されているのが見て取れます。この建物は、箱根土地の第12回報告書（大正14・1925年下半期：大正14年6月1日～同年11月30日）で、その建築が示されている箱根土地の仮事務所とみられるものです⁵。箱根土地の元社員からの聞き取り資料でも、「ロータリーのところに3mぐらい高く土を盛ってそこに事務所をたてて、そこで客を案内した。そしてだいたい分譲ができてもういいというので池を掘って水きん舎にした。」⁶と語られており、この写真に写る盛り土の上の建物が、箱根土地の事務所として使用されていたものであったことが分かります。

さてここで、先ほどまで紹介しておりました国立駅前の展望台計画を思い起していただきたいのです。資料3にみられる仮事務所の盛り土。これはまさに展望台と同じ役目を担ったものだったのではないのでしょうか。国立の分譲地を見学を訪れた人々へ、高い位置からまちを案内できるようにしていた装置だったと考えられるのです⁷。

この仮事務所設置の計画と、先の展望台設置計画のいずれが先に予定されたものだったのかは詳らかではありません。展望台を設ける計画から盛り土が施され、ひとまず上に仮事務所を設けていたのか、あるいは仮事務所の盛り土があったので、それを転用して展望台を計画したのか、いずれの可能性も考えられるところです。

資料2の法面にある「盛土」の記載をみると、45立坪（270㎡強）の土を用いて展望台を築く予定だったようですが、「盛土」の品目には計算の単価や金額が記されていません。この「盛土」用の土は、国立大学町開発における道路造成などで生じた残土を利用したのでしょうか。あるいは、資料3に写る仮事務所の基礎となっている盛り土をそのまま転用しようとしていたのでしょうか。いずれにしても展望台を築く「盛土」の費用が計上されていない点が気にかかります⁸。

国立駅前に展望台の設置計画があったことを紹介してきましたが、この計画が実現する

⁵ 「国立大学町ニ仮事務所及余興場各壱棟ヲ建築セリ」（箱根土地『第十回報告書』大正14年下半期3頁）。

⁶ 『私たちの町くにたち 聞きとり資料（1）国立開発～昭和20年』（国立市公民館図書室所蔵）「芦沢栄さん（もと箱根土地社員）の話 76.5or6月」。なお、芦沢氏は「3mぐらい高く土を盛って」と語っていますが、この仮事務所が写る他の写真を含めて中島陟資料で確認する限り、3mまでの高さはないようにみられます。

⁷ 東京商科大学（現一橋大学）の大学新聞『一橋新聞』第31号（大正15・1926年3月15日）2面の「建設中の国立町」では、「国分寺駅から箱根土地会社に依つて仕立てられた自動車は未来の東京商科大学や国立大学町をほうふつとこの土台石の上に転開しつゝ飛ぶ。同乗者は六七八人皆ふところの太つた人々らしい。こうやつて毎日この種の国立理想郷創設者が三台もの自動車を休ませずに駆つておとづれると。」と報じており、国立駅開業前から分譲地を見学を訪れる人々のいたことが知られます。

⁸ 展望台工事費として、「人夫」50人分の人件費（他に「植木職」20人分もあり）が計上されています。盛り土の造成まで含めた展望台の設置工事として、この人件費が妥当であったのか否か、同時期における類似工事との比較が必要なところです。

ことはありませんでした。国立駅開業前までは、仮事務所の盛り土はありましたが、この盛り土も国立駅開業時には取り除かれています⁹。

ところで、その盛り土の上にあった仮事務所はどうなったのでしょうか？前回は紹介しました下の写真（資料4）をみてください。



資料4 停車場内より見たる一ツ橋大通り

『国立大学町 音楽村土地分譲』掲載写真より
大正15（1926）年 くにたち郷土文化館所蔵

この写真では、駅前広場にあった箱根土地の仮事務所と盛り土がなくなっていること、未だ水禽舎が設置されていないことが認められます。また、大学通り沿い東側に建てられる「国立マーケット」は、まだ足場が組まれた段階であろうことも窺われます。そして、その手前、駅前広場の東南角地に平屋の建物が写し撮られています。この平屋の建物は、駅前広場の盛り土の上にあった箱根土地の仮事務所と外観がとてもよく似ています。聞き取り資料などを含め、この建物について記されたものが検出できず、写真資料からの推測によるものですが、この平屋の建物は駅前広場にあった箱根土地の仮事務所を曳家あるいは移築したものではないのでしょうか。



資料5

絵葉書：一路多摩川へ（国立駅より）を加工
昭和2（1927）年 くにたち郷土文化館所蔵

この建物について情報をお持ちの方、何かしらご存じの方がいらっしゃいましたら、是非とも当館までお知らせください。何卒よろしくお願ひします。 【2020.04.18: 中村記】

⁹ 国立駅前広場の現在の円形公園部分は、国立駅開業時には円い広場となっています。そこで開業式典が執り行われたり、開業祝賀会の催しが行われたりした点は、前回の資料紹介で提示したところです。